

コラム 地名と地学

安土と安土城

天正四年(1576)、織田信長は琵琶湖内湖に突き出した標高199m、周囲3~4kmの小山に目をつけると、丹羽長秀に総普請奉行を命じ、城を築き始めた。四年足らずのあいだに、高さ50m、五層七階の天主閣を持つ壮麗な城郭はほぼ仕上がり、天正七年、信長は岐阜から居を移した。信長はこの地を「安土」と名づけ、城を「安土城」と呼ばせた。

さかのぼる天正三年、長篠の合戦において武田勝頼軍を鉄砲の三段構え一斉射撃と言う新戦法で打ち破った信長は、“東からの脅威も薄らいだ今、岐阜では天下統一のためには東に片寄り過ぎる、琵琶湖を背にした安土なら京にも近く、攻めるにもよし守るにもよし”と彼なりの戦略眼があってこの地を選んだに違いない。

安土の名は、もともと地元にあった地名から採ったとする説、いや「平安楽土」を縮めて「安土」の地をここに創らんと、先だつての「岐阜」同様に、信長の「施政方針」を「安土」の名に込め、これを天下に宣言したのだと言う説がある。後者の説は、いかにも信長が演出しそうな説である。

歴史作家司馬遼太郎は、二度安土山に登っている(『街道を行く』(近江散歩)編「安土城趾と琵琶湖」の

章)(昭和59年週刊朝日連載)。最初は中学生のとき、二回目はこの紀行エッセイ執筆のためである。

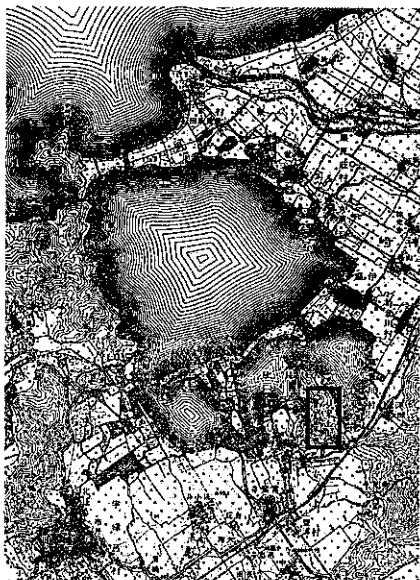
氏はこのエッセイの中で大筋、“中学生の時には城趾からは、目の前いっぱい琵琶湖が広がっていたが、今回山頂から同じ方角を望んでも、昔見た水景は跡形も無く、赤っぽい陸地が広がるのみで失望した”と書いている。

氏は大正12年(1923)生まれだから、中学生時代と言えば昭和10年頃、二度目の訪問は昭和50年代末になろうか。ほぼ半世紀のあいだに安土山からの景観がまったく変わってしまったと、氏は嘆くのだ。

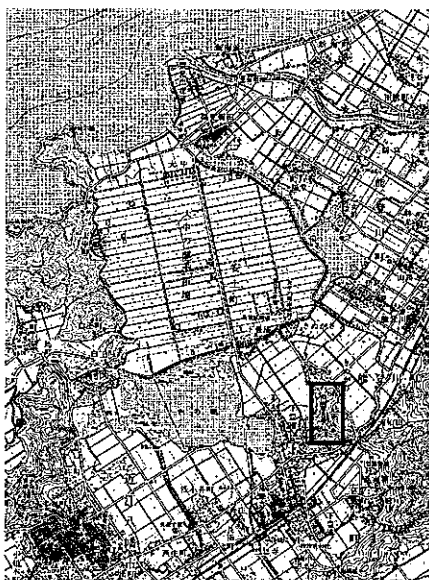
この話が本当かどうか、安土山周辺の今昔の地形図を並べてみる(第1図)。左が明治から昭和初期の地形、右が現在の地形である。次に琵琶湖の干拓史を調べてみる。安土山北部周辺の「小中の湖」の干拓は昭和18年に始まって同21年に終わり、その北の「大中の湖」は昭和21年に始まって同43年にすべて干陸したとの記録がある。つまり、氏が中学生の頃に見た昭和10年代の景色は左図の、二度目の昭和60年頃に見た景色は右図のようなもので、確かに時間的な経過にピッタリあう。

吉田ほか(2003)の5万分の1地質図幅「近江八幡」では、安土山は全山、湖東流紋岩類のメンバーの一つ瓶割山溶結凝灰岩からなるとされる。湖東流紋岩類とは、琵琶湖東岸(湖東)から鈴鹿山脈西部の円弧状の

干拓前(明治頃)



干拓前(現在)



0 5km

第1図 安土城周辺の地形変化。干拓前(左図)は国土地理院5万分の1地形図「多景島」(明治26年測図)と「八幡町」(明治25年測図)を使用。現在(右図)は彦根西部(平成3年修正測量)と「近江八幡」(平成8年修正測量)を使用。

範囲に、白亜紀後期-古第三紀に形成された湖東コールドロンが噴出した酸性火山岩類の総称である(「近江八幡」の東どなりの「御在所山」図幅(原山ほか, 1989)にもくわしい解説がある)。

安土山は、湖東流紋岩類が分布する西の端にある。安土城の石垣や石段に用いられた石材も、周辺の湖東流紋岩類からなる山地から切り出され、ここまで人力で運ばれたとの記録が残っている。このように安土城は、6-8千万年前に噴出して固まった湖東流紋岩類からなる安土山に築かれ、石材も同じく湖東流紋岩類が用いられたのである。

安土山のように湖東流紋岩類起源の小山は、周辺に数多い。溶結凝灰岩からなる山地は地盤が強固なためか、戦国時代、多くの山城が築かれたことが記録に残されている。例えばすぐ東に位置する織山には、六角氏の根拠地であった観音寺城趾がある。

湖東流紋岩類の外側には、これを円弧状に取り囲む同時期の底盤状花崗岩類(たとえば田上花崗岩や比叡

花崗岩)があり、最近の研究から湖東コールドロンの給源マグマが冷却固化した花崗岩類と考えられている。この花崗岩類も多く山地を作っているが、調べた限りでは、寺院は建立されたが、山城はつくられなかったようだ。この辺りの花崗岩山地は表層の風化が進んで真砂化している場所が多いため、地盤も悪く、保水も悪かったので築城には適さなかったのだろうか。

安土城が普請された頃、安土山は琵琶湖内湖に半島のように突き出していた、平野からの比高約100mの山頂に、高さ50mの天主閣を持つ安土城(あわせて150m!)が威容を誇り、信長の権威と権力の象徴となっていた。当時の人々はその壮麗さに目を奪われるとともに、新しい時代がやってきたと、否応なしに教えられたことだろう。

安土城は本能寺の変直後に出火炎上し、再建されることも無く、そのまま朽ち果てにまかされた。当時の面影を残すのは、ふもとの摠見寺と苔むした城壁のみである。(吉田史郎)

..... 編集後記

◆ 新年あけましておめでとうございます。地質調査総合センターも発足以来3年目に入りました。今年の干支は羊とか。本誌も「羊頭狗肉」にならないよう、精一杯編集に取り組んで行きたいと存じます。

◆ 昨年12月9日、関東地方は20年ぶりの大雪に見舞われました。ここ数年来、暖冬になれた身体には寒さがこたえ、風邪気味の日が続きました。予報でも今年の冬は冷え込むとのこと。健康第一と言うことで、皆様もお気をつけ下さい。

◆ いつも言うことですが、本誌は京のお茶屋さんのように「一見さんお断り」ではありません。今月号も、『ラルピカイト長石』と『文学作品の舞台・背景となった地質学』の2本は、外部の方から投稿していただいた記事です。本誌にふさわしい水準を持つ記事はどしどし掲載する方針ですので、皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

(吉田史郎)

地質ニュース編集委員会

委員長：吉田史郎
副委員長：谷田部信郎
委員：磯部一洋・関口春子・中島 隆・
安川香澄・飯笹幸吉

連絡先：地質調査総合センター 地質標本館
〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1
Tel. 029-861-3754
Fax. 029-861-3569

地質ニュース	第581号	2003年	1月号
	定価¥785(本体価格¥748) 円実費		
2003年1月1日	発行		
編集	産業技術総合研究所		
発行人	株式会社 実業公報社		
	代表者 林 光生		
発行所	株式会社 実業公報社		
	東京都千代田区九段北1の7の8 〒102-0073		
	Tel.(03)3265-0951 Fax.(03)3265-0952		
	E-mail: jk@jitsugyo-koho.co.jp		
	振替口座 00110-6-32466		
	麹町局私書箱第21号		
印刷	株式会社 エアフォルク		

©2003 Geological Survey of Japan

●本誌は東京都の霞ヶ関政府刊行物サービスセンターおよびつくば市の友朋堂書店本店に常備してあります。また、最寄りの書店でも注文できます。

地質ニュースに関するご意見は編集委員会へ